

令和7年度 第2回 都市計画サロン 報告

日時：令和7年8月1日（月）

参加者：7名（オンライン含む）

演題：「ソシオファンド北九州が実践する社会投資
～“学び”の視点から見る価値について～」

講師：菅恒弘氏（一般社団法人ソシオファンド北九州 代表理事）

講演内容：

【団体設立の背景と経緯】

一般社団法人ソシオファンド北九州（以下、SFK）は、北九州市を拠点に、産官学の多様な分野で本業を持つ市民が集まり、社会投資の実践と普及を目的に活動している非営利型一般社団法人である。団体の中心概念となる「社会投資」とは、一人ひとりが可能な範囲内で、資金のみならず時間や知識、スキル、ネットワークなどの人的資源を用いて、自身の暮らす地域や社会の課題解決や活性化に取り組むことである。構成メンバーは多様な専門性を有し、それぞれの知識や経験を活かして市民による課題解決を支援している。設立の契機は代表理事の菅氏が北九州市役所に入庁後、読んだ一冊の本にある「社会の課題解決は行政だけの仕事ではない」という言葉との出会いに遡る。この言葉を契機にソーシャルビジネスへの関心が高まり、北九州市立大学のビジネススクールへ進学。その後、NPO法人ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京へ参加し、その活動をモデルとして、ソシオファンド北九州を立ち上げた。

【社会投資の実践「協働事業びびんこ】

同法人は、社会課題に取り組むソーシャルベンチャー（個人、法人関わらず社会起業家および社会的企業やNPO等）に対して、メンバーの年会費を原資とする返済不要の助成と伴走支援を組み合わせた協働プログラム「びびんこ」を展開し、市民が社会投資を実践できる場を創出している。（“びびんこ”は北九州の方言で“肩車”を意味する）スタートアップやベンチャーの団体が多いことから支援は多岐にわたる。具体的には、定期的なミーティングを通じた対話により各団体の課題に寄り添いながら、事業計画の立案、広報物の作成、代表者等との壁打ちなど、多岐にわたる支援を行っている。これまで約10年間で、幼児教育、福祉、環境などの分野において18団体の活動を後押ししてきた。

本事業の特徴は大きく二つある。第一に、外部からの助成金に頼らず、メンバー自身が年会費を通じて出資し、本業を持つメンバーが「本気の伴走」する体制をとっている点である。第二に、メンバーが本業とは異なる分野や自らの興味関心以外の領域に触れ、「本気の伴走」を通じて、他人事だった社会課題が「私たちごと」へと変化する点にある。このような社会投資

の取り組みは、メンバーの「学びの場」としても機能しており、人が生涯にわたり自らの意思で、あらゆる機会で学び続ける「生涯学習」や学校教育や家庭教育以外の場で行われる組織的な教育活動である「社会教育」の場にもなっている。

【北九州市における生涯学習との関連】

SFKでは毎月1回、特定のテーマを設けない「対話会」を開催し、参加者同士の偶発的な出会いや異分野間の交流を促進している。こうした協働プログラム「びびんこ」や定期的な対話会などの実践を通じて、代表の菅氏自身も、それらの活動が自身の“学びの機会”として機能していることを実感し、まちなかに学びの場を創出していくことが重要であると振り返った。現在、菅氏は北九州市の生涯学習分野に従事し、社会教育主事として地域の生涯学習や市民活動の支援・推進に取り組んでいる。このキャリアは、SFKでの取り組みと地続きのものであり、実践を通じて培ってきた経験が現在の職務に活かされている。

北九州市では、小学校区ごとに市民センターが設置されており、生涯学習・コミュニティ活動・保健福祉活動の拠点として、市民にとって最も身近な公共施設となっている。令和7年度からは、NPO法人等が有料の講座やイベントが実施できる「多目的利用」や市民センター館長採用での「民間経験枠」設置といった、新たな力を市民センターや地域活動に生かしていく試みがスタートしている。こうした民間レベル、行政レベルの動きを通じて、市民一人ひとりが社会課題に触れ、自らが暮らす地域への関心を深めていく学びの場が「まちなか」全体へと広がっていくことに繋がっている。

市民センターのような行政施設だけでなく、SFKのような民間主体による「学びの場」の創出は、都市における学びと市民参画の接続点となっている。

意見交換：

SFKによる「自ら出資し伴走する」スタイルの意義や、市民センターにおける民間の力を活かした新たな取り組みについて意見交換がされた。

（文責：北九州市立大学 矢ヶ井那津）

